
いま、そこにある爆弾

真面目ヒョー太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いま、そこにある爆弾

【Nコード】

N8539G

【作者名】

真面目ヒョー太

【あらすじ】

どこにでもいる中学二年生のケンが、夏休みに体験した出来事は！

(前書き)

ええっと、去年書いたものです。お手柔らかにお願いします。

うっぴょーん！ と、意味のわからない言葉で始めてみることにする。意味はない。インパクト勝負。僕の名前は、ケン。ケンと呼ばれている。それ以上に短く呼ぶためのあだ名が無いからだ。短くしようとするとかになっちゃうよ、ケに。最初から飛ばしすぎてよくない、まともにやんなきゃあ。言いたいことはというと、僕は中学二年生で、あんまりキチンとした文章が得意じゃない。ここここ今回、夏休みの作文ということ、僕が夏休みに遭遇した、貴重な体験のことを書くこうと思う。そのことを思い出すと、おもわず「こ」を連打しちゃうくらいここここ興奮してきちゃうんだけど、本当に貴重な体験だったとおも。あと、まあ読んで貰ったらわかるだろうけど、僕は本当に国語の授業ってやつがもよおすほどに嫌いだ。だから、真面目にやるつもりがない。ゴメンネ！

うっぴょーん！ はい、というわけで七月の三十日だ。あの日はとても暑かったことを覚えている。まあ夏休みのほとんどの日が暑かったけど。今日が八月三十日だから、ぴったし一ヶ月前。その日、僕は待ち合わせをしていた。ユウトとコウ。仲の良い友達の二人だ。落ち合うのは、駅前のゲームセンターの前。僕たちはある噂を耳にしている、それを検証しようということになっていた。噂っているのは、無性に検証したくなるものだよね。そうでもないね！ そうでもないんだけど、まあその噂ってのがすごく身近な話題で、それにインタレスティング（この間覚えた）な内容だったから検証しようということになったんだ。

北丘の森に死体が埋まっている。それが噂の内容だった。本当はもっと厳密にどういふ場所か、とか、どんな日付の死体で、っていう尾ヒレがついていたんだけど、書くのが面倒くさくて割愛。とにかく、地元のよく知っている森であるということと、スコップさえありゃあいいという検証のしやすさが僕たちの好奇心をくすぐ

った。それに死体を探すというのは、夏ならではの肝試しっぽい感じもして風情もあると考えていた。他の人がどうかは知らないけど、少なくとも、僕ら三人は。

スコップを持ってチャリ、もとい自転車、いや、お自転車？ 丁寧にしよとすると収拾がつかなくなりそうなのでチャリで。チャリにまたがり、ゲームセンターの前へと向かう。僕は時間にルーズなタチだから、ユウトもコウもすでにそこにいた。「おせーよ！」とか「なにしてたんだよ！」とか謂われのなくはない誹りを僕は一身に受け止め、へーこらと謝る。まあよくあることで、僕たちの間では儀式みたいなものなんだと僕は受け止めている。他の奴がどーかは知りません。まあそんなくだりをやり終えたあとにコウが口を開く。コウは賢いので僕はインテリと呼んでいる。あ、呼んでいない。ちがう、心のなかで呼んでいる。心のなかだけで。

「で、森だろ？ 森ったってどこよ？ 結構広いぞあそこあ。全部掘るの？」

「んなわけないよコウ（心のなかではインテリ）、場所、ハッキリしてんだって。いってやってよ。ユウト」

ユウトは体育会系！ というほど運動が得意なわけじゃないが三人の中では一番運動が出来た。部活は囲碁部。僕は心のなかで第二のインテリと呼んでいる。嘘だ。

「あっこよあっこ。一番デカイ、ほら、森の国道の方の入り口に近いとこにある、ちっこい神社みたいなのあるっしょ。あそこの近くにある木だよ。あの根元だつてさ」

「あの根元だつて！ ウー！ ウー！」

「ケン、うっせーぞ。なんだウー！ って」

「テンション」

曖昧だが、多分そんな会話をしたのを覚えている。断じて、カギカッコで文字数を稼ごうとかそういうことじゃない。邪推はよくないよ！ 人を！ 信じる！ 心を！ 持たなきゃあ！

で、そんな下らないどうしようもない度し難い話を十分ほどする

と(十分に充分、なんちゃって)、僕たち三人、自転車にまたがり件の場所を目指す。駅から国道を挟んだ真向かいに、その森林公園はある。クラスの女の子達がブス沢さんを連れ込み、色水の入った水風船を投げつけたり焼きごてで尻に「うんこ」とか酷い言葉を刻みつけていることで有名なあの森林公園だ。夜だったので、クラスの女の子達もブス沢さんもいなかった。よかった。

「暗いな。怖いよ!」

「おめ、コウ、懐中電灯持ってきてねーのかよ。俺もってきてんぞ。ほら。チカチカ」

「僕も持ってきてるよ。コウはだめだなあ」

「俺はダメじゃねえよ! ダメってなんだよ! コウの、それ、懐中電灯じゃねえじゃん! なんかコンサートとかでアンコールのときパキッてやって発行するやつじゃん!」

「100円シヨップで百円だった。もつとするかと思ったけど」

「100円シヨップだったらそりゃ百円だよ!」

「おめーら、うっせーぞ。ほら、俺先頭に立つから、ビビってねーでついてこいよ」

こういうとき、一番頼りになるのはコウトだ。彼はあまり幽霊とかを信じていないらしく、暗闇もあまり怖がらないような奴だった。過去形だが今も多分怖がらねえんじゃないの? しらねえ! アイツにどんな変化があったかもしれないなんていう可能性のことはしらねえ!

「こっちの入り口の……と。ほらあつたあつた。これな。ちっこい神社」

「おやしるさん、とか言うんじゃないのこつ言うのって。ほら、パンパンとしこつ」

コウの提案で僕らは三人馬鹿みたいに、いや実際馬鹿だからみたんじゃない、馬鹿に手を叩く。

パンパンx3。

「で、こっちのが、でかい木だ」

コウトがライトで木を照らす。夜の木は不気味で、なんとなくゲームのボスキャラのような佇まいだった。僕は正直怖かったが、コウトはまったく平気そうな顔をして、スコップを地面に刺した。

「誰か照らしといてくれ」

「僕は掘るよ。コウ、照らしといて」

「わかった」

そのように僕たちは分担をし、せっせと作業を始める。地面は歩き固められているためか、大分カチンコチンな状態で、最初は苦労したけどあるところを過ぎるとすっと楽になった。ザックザック。

「うわっ！」

コウがいきなり声を出してビクツとする。勿論懐中電灯の光も揺れる。

「なんだよコウ」

「も、ものおとがして……」

コウはビビリだ。

「物音ぐらいでいちいちビビってたら、モノそのものが出てきた時にはどうなっちゃうのよ」

「そんなときゃ死んじゃう」

「ハハハハハ」x3

なんとなく和む三人。馬鹿。僕も暗いところは得意じゃないが、ここは森の中でも比較的国道に近く、街の灯りを確認することができた。だから、あんまり怖くなかった。

「えっほ、えっほ」

「よいしょ！ よいしょ！」

「……………」 照らしているだけのひと。

黙々と僕たちは地面を掘る。何か出ることを期待したわけじゃなかった。実際、何も出なくてもいいと、僕は思っていた。思い出話ぐらいにはなる。夏休みあんなこととしてさー、結局なんもなかったよアハハハハと、休み明けにクラスのみんなに話せるだけで充分だった。多分二人も同じだったと思う。死体が埋まつてる？ それ

「おええええええ！？」

僕たち二人は素っ頓狂な声を出して驚く。まだ半分も見えていない鉄塊。これが、バクダン？

「いや、俺も確かなことは解らないけどさ。もうあんま触らないほうがいいんじゃない？ 動かすと……どーんってなっちゃうかもしれないし」

「そそそそそうだな！」

ユウトはわかったのかわかっていないのか、とにかく慌てて掘っていた穴から出る。ズザザザ。土が崩れる。

「うわわわわ！」

「ほら！ 刺激あんま与えんなって」

ユウトが怒られているのを尻目に。僕はゆっくりと穴から出る。

ユウトも、なんとか穴から脱出したみたいだ。

「ふう……。爆発してない……。生きてる」

「パンパンしたおかげだね。神さまありがとう」

僕たちはおやしるさんに一礼をした。僕たちはそそくさと穴から離れて、会議をする。

「で、どうする。警察呼ぶ？」

とりあえず、一番あり得る提案を試してみる。

「ま、まあそうだな。それがいい……。それにしても生きてる。パンパン」

ユウトは心ここにあらずといった様子で、おやしるさんに向かってパンパンし続けている。

「いやー、でもさー。こんな夜に森ほじくり返してたことバレたら、超怒られるよ。ほら。ガリ後藤に」

補足しておく、ガリ後藤というのは、体育の後藤先生のことだ。太っているのでデブ後藤と最初は呼ばれていたが、発覚を恐れる僕たちはいつしかガリ後藤と呼ぶようになった。正反対の言葉をつけることによって、中和しようと思ったのだ。毒素を。それだったら後藤の部分を変えた方がいいが、ガリ後藤の前でガリ後藤まじでむ

かつくよなーという話をしていてもガリ後藤は妙な顔をするだけでバレなかったのだからこの呼び方でいいんだということになっている。

「あー。そりゃいやだなあ」

ユウトは落ち着きを取り戻したのか、こちらを向いて話に参加する。

「いやだけど。人の命かかってるし」

「おつ、ケン。人道的だね。お前ヒューマニスト？　いやーじゃん知らないやつ死んでも」

先生、コウ君がこんなことを言っていました。

「やだよ。知ってるやつ死ぬかもしれないもん」

「じゃああれだな。匿名で通報。携帯だとなんだかバレそうだから、公衆電話から」

「それだ」×2

早々に閣議決定が為された。僕たちは逃げるようにその場を後にし、公衆電話を探す。

「駅まで行けばあるかなあ」

「いや、最近さ、駅前の電話撤去されたんだよ。だからさ、駅構内に行かなきゃいけない」「もう終電から大分経ってるからなあ。シヤッター下りてるだろ」

携帯電話普及の弊害がこんなところにも。最近急速に姿を消しつつある公衆電話。僕たちも携帯を持っているからあまり意識して場所を覚えていない。これはどうしたものだろうか。ああでもない、こうでもない、とどうしようもない意見ばかりが飛び交い、電話を発見できないまま、僕たちは森の前の道に戻ってきてしまった。「コウ、今何時？」

「三時前。深夜。どうする？」

僕たちは完全に指針を失っていた。ほおっておくことも出来ないけど、バレるのもいやだ。進めず戻れず。うんうんと悩んでいる。

三人腕を組んで。馬鹿だ。

かつーん。

そんなときに、音が聞こえた。

「かつうん？　なんだ今の音」

ユウトが反応して、森の中を見る。暗くてよく見えない。

「……」

コウが何かを考えている。そしてひらめいたように手のひらをパ
ン、と叩いた。

「ほら、丑の刻だ。今」

「へ？」

僕はあつげにとられて、彼を見る。

「丑の刻だよ。呪い！　知らない？　丑の刻参り」

それを聞いたとき、背中にゾツとした何かが走り抜けた感覚を今
でも覚えている。話で聞いたことはあつたけど、丑の刻参り？　リ
アルに？　二十一世紀に？

「なんだってこんなところで……」

と、言いかけてハツと思いつくことがある。おやしるさん、があ
つたじゃあないか。そしてここらには大きな神社なんかない。と、
すると……。

「お、おい、大変だよ！　多分あの木だ！　あのデカイ木！　あそ
こに釘打ってる！」

「え、そりやまずいな！」

ユウトも気付いたように声を上げる。あたりは暗い。釘を打って
いる、ミスターだかミスだかは知らない丑の刻参りの人が、落ちて
しまったら。偶然でも、そのハンマーが爆弾に当たったら。

「と、止めないと！」

「おい、ケン。でもなあ丑の刻参りって言えば見られたらそいつを
殺さなきゃ自分が呪われちゃうんだって話マンガで読んだことあん
ぜ。丑の刻に参っちゃうぐらだからマジキチだよ。殺されるぞ」

「い……行けず戻れず……っ」

「け、ケーサツ呼ぶかケーサツ。この際携帯で」

「ダメだよ間に合いつこない！」

事態は切迫しているように思えた。それに、僕たちが立っているこの場所だつて、ちょっと離れてるにしたつて、爆弾の被害が無いとは限らない。

「そうだ、隠れて……」

「隠れる？」

二人は首を傾げる。

「隠れて、ユーレイのフリしてさ。おどかすんだよ。丑の刻参つちやつてる人をさ。呪いを信じてるぐらいだからさ、ユーレイも信じると思うし！」

これは、なかなかいいんじゃないか？

「妙案」^{コウ}「グッドアイディア（ユウト）」二人もそれぞれの語彙を用いて褒めてくれた。

「決まったら早い方がいいな。アハハハハハハハハ」

「ど、どうしたコウ笑つて」

「なんだか楽しくなつちやてアハハハハハハハハ」

「こいつはもうだめだ。ケン、二人で行くぞ」

やっぱり、こういうとき一番頼れるのはユウトだ。

笑い転げているコウを置いて、僕たち二人は森の中に行く。ばれないようにライトはつけない。途中で二、三体幽霊とすれちがつたけどそれぞれころじゃあない。人命がかかっている。呪っている人の、僕たちの、ひいてはご町内の皆様も死んじゃうかもしれない。そんな緊迫した状況だつていうのに、僕はなんだかハイになっていた。地球を守るんだ！ ともしたかしたらその時はそれぐらいのことを思っていたかもしれない。少し歩くと、ぼんやりとした蠟燭の光りが見える。あの辺りは……穴のすぐ近くだ。かつーん、かつーんと徐々に大きくなる音。僕たちは息を潜めて話をする。

「（どうやら穴にや気付いていないみたいだな）」

「（ま、まずいなあ）」

徐々に近づいていく。かつーん、かつーん。静かな森に不気味な音が響く。

「（うわあ、ありゃあコウの言うとおりのマジキチだな。かなり入れ込んでるよ。髪が長い。……女かな）」

「（そうだと思うよ……。呪いを信じてる男って、多分一生ドーナでもん。滅多にいないでしょ）」

「（一生童貞が？ 呪いを信じている男が？）」

「（後者）」

かつーん、かつーん、下らない冗談を言っても一向に気の晴れることがない。そんな緊張感。呪いの現場というのは僕の中のみ見たくないものランキングで大体五位ぐらいに位置する。他はこちら

一位 両親のセックス

二位 猫の死体

三位 X JAPANのライブ

四位 ちきゅうがおわるところ

そんなことを考えても気は滅入るだけだ。

「（あいつ、どっかで見たことあんな……）」

ユウトが目を細めて、参っちゃっているガールを見つめる。めんどくさいんでこれから参ガと表記する。サンガと読む。くにやぶれてサンガあり。と、冗談で中和できるような状況じゃあなかったんだね。

「（あ、あれ平沢さんだ！ ほらクラスの女子に虐められてる……）」

「ちらりと見える横顔。それはブス沢、こと平沢さんに間違いなかった。僕も同時に確認をする。」

「（ほ、ほんとだ。色水の入った水風船をぶつけられたりや焼きごてを押しつけられたりでお馴染みの）」

「（何言ってるんだよ。馴染んでねえし、そこまで酷いことされてねえだろ）」

「（誇張した）」

嘘をついていた。そこまで酷いことはされていなかった。彼女がされたことと言ったらそうだったあからさまな奴じゃなく、女子っぽい、もっと陰湿なイジメだったと思う。僕は可哀相だなとは思っていたけど助けることはできなかった。見て見ぬふり。傍観者。傍観者は加害者と同じだなんて言うけど、だってそうだろ？ 僕にはなにも出来ない。あんたなら、何もなかった。でも、呪いなんて大層な準備が必要な、しかもとるに足らないオカルトに手を出すくらいまで彼女が切迫している、と考えると、少し……なんと……だろう……悲しい気持ちになった。平沢さんは、さほどブスじゃなかった。でも僕たちはブス沢さんと呼んでいた。なんでかって？ 「冗談のつもりさ。ブス沢なんてのは可愛げがある呼び名じゃん。なんて思うのは僕ら達だけで、彼女自身は想像以上に参っていたんだろ。……僕らも間違はなく加害者だ。だけど、少なくとも、その時は反省している場合じゃなかった。

「（で、どうやって脅かす）」

同じようなことを考えていたのだろうか。すこし、渋い顔をしてユウトが言う。僕は考える。知り合いとなると……やりづらい。赤の他人でも決してやりやすいことじゃないけど。

「（この森で呪いを行うのはだれじゃあ。でどう？）」

「（お前が誰だよ！ って話だろそれ。真剣に考えるよ）」

「（すみま千円）」

「（その辺りが真剣じゃあない。大体お前はいつもそうだよ。俺らが真面目な時だっていつもふざけてんの。その辺りがね、センスに目をつけられる理由だよ。作文だって真面目にこなしてりやあいいものを、あえて馬鹿みたいに書いたりすんだから）」

なんでこんな状況下で説教をされねばならないのだろうか。僕は少しムツとした。

「そんなことより！ いま、そこにある爆弾のことをね！ ほかあね！ 考えたほうがいいと思うんですよ！ いま！ そこに！ あ

る！ 爆弾のことを！」

……結果、声を張り上げてしまった。そそそそりゃあ、ちょっと馬鹿みたいだよ。せっかくバレずに接近出来て、脅かそうって時に声を張り上げちゃうんだもん。ギャグ漫画みたいだよ。しかも昭和のやつ。でも、ユウトにも多かれ少なかれ責任はあると思うんだ。それを明確にしたいんだ！ っていうかこんな状況下で説教するやつがあるかい！ そりゃあムツとしてもしょうがないだろ？ だつてさ。緊迫してんだから、イライラしちゃうもん。あと、朝食だつて僕が嫌いなベーコンが出たし、昨日楽しみにしてたテレビが特番で潰れちゃうし……言いたいの、僕が馬鹿なことだけが要因じゃないってこと。

「(なっ!)」

ユウトが小声で驚く。こいつは器用なやつだ。そして、かつーんという一定のリズムを刻んでいた音が、止まった。

ゆらあり。

まさにそういった感じで、平沢さんは振り向く。

「……誰!？」

鬼の形相。僕は鬼を見たことが無いんだけど、てへっ、この年になつて恥ずかしいよね鬼の一つも見たことがないなんてっ! ……でも実際に鬼がいたとしても、その時の彼女の顔よりはおっかなくないと思う。そういう意味では超鬼の形相。彼女が、僕たちが隠れている茂みをキッと睨み付ける。手には金槌。英語にするのであれば、アイアンハンマー。RPG風に言うなら女バーバリアンAといった風体の平沢さんに、僕は心底びびった。そして本当に、うんこやしっこじゃないもつと高次元の、メタ的な、メタ的ななにかを、漏らしてしまった。

「ぎゃあああああああ!」

正解は叫び声。僕もユウトも一斉に叫んでいた。

「そおこおかああああああ！！」

ハンマーを振り上げ、猛然と襲いかかってくる平沢さん。なんだそれ！ 化け物みたいな声だ！

……ま、まあ弁護するわけじゃないけど、彼女も、その、お呪いの最中で、ちよつと気分がハイに、というかトランス状態になっていらつしやっただと思う。じゃないとあんな長渕剛の声を五十回重ねてその上にディストーションをかけたみたいな声って、出ないものね。うら若き乙女からは、ちよつと。

「こつちくるこつち！」

「ええええ！」

僕たちは立ち上がり逃げようと走る。彼女も猛然と、走り出そうとする。

「うおおおおおおおおお！」

そんな北欧の海賊みたいな雄叫び上げないでくれ！

彼女が走り出そうと、一歩足を前に出す。

「ひゃあああ！」

「くんな！ くんな！」

そして、その瞬間

「うおおおおおおおー（ストツ）きゃあああああ！」

……消えた。僕は一瞬で状況を理解する。あっ、落ちた。穴に。

僕たちが掘った穴に。爆弾の眠るあの穴に。

「あ、え、お、あ！」

やばい！ でも出来れば近づきたくない！ ……近づかないわけには、いかないよなあ……どうせここにいても死んじやいそうなのには変わりないし。

僕はおそろおそろ穴に近づく。中には何が起こつたのか解らないといった顔の平沢さんと、鉄の塊が。……体は触れてないようだ。よかった。

「え、あ、その、平気ですか」

「（きよとん）」

「平気、そうですね。よかったです」

僕は精一杯優しい声を出して、穴の中の平沢さんに語りかける。顔には笑顔を浮かべたつもりだったが、意味不明の状況と過剰な緊張感で、多分、引きつっていたと思う。

「えっと、ですね、落ち着いて聴いて欲しいんですけどね。貴方が落ちた、その穴、のなかにね。爆弾、があるんです。だから、その、ゆっくりと出ていただいて、で、出来れば手からはアイアンハンマーのほうを離していただいてですね、べ、別に悪いようにはしないです。大丈夫です」

「……………は？」

平沢さんはワケがわからないといった状態で、目の前の鉄の塊を見る。そして僕の顔。交互。

「……………あなた……………本条君……………？」

自分も忘れかけていた僕の名字だ。

「そうです。ME本条、YOU平沢、THIS爆弾」

「……………みみみみみみ」

僕の頭はフル回転する。み？ 本条〃ほ、平沢……………ひ、爆弾……………

ば。となれば「ME」のことか？ MEを連呼する？ 自己紹介？

英国風？

「見られたああああああ！」

見られた、のコトか！ 平沢さんは顔を真っ赤にして、ハンマーをブンブンと振り回す！

「ごめん本条君！ 死んで！ とりあえず！」

「むむむむむ無理無理無理無理！」

「死ねえええええ！」

平沢さんがトランス状態に戻ってしまった！ ま、また大ピンチだ！

「お、落ち着いて！ えっと、人を沈静化させる呪文は……………ねえ！

そんなものは現実世界には！ 落ち着け俺も！ あわわわわわ、ば、爆弾のくだり聞いてた！？」

「とりあえず死んで死んで！」

ぶんぶんぶんぶん！

「……なにやってんのお前ら」

ユウトが、なんだか冷静な様子で後ろから語りかけてくる。こゝ、こいつ後からのろのろとやってきやがったな……！？ とその時は思った。

「殺される！ いや爆発する！ どのみち死ぬ！」

ハンマーをブンブンと穴の中で振り回す平沢さんをみてユウトは顔をしかめる。

「とりあえず落ち着かせよう。爆弾にハンマー当たったらただごとじゃあすま……」

「いーん！」

「……鉄の音響いたな」

「……………」

「……………」

僕とユウトは顔を見合わせると、猛然とダツシユ！ ごめん！

平沢さん！ 忘れない！ 忘れないけど！ だって、自分の命が一番大事だもん！

そして、近くの茂みに駆け込むと伏せる。目を閉じる……。一生で一番長い瞬間。アア、神さま、僕はこんなところで死ぬんでしょか。パンパンが足りなかった？ もうちょっと良い肉を食べたかった。ゲームも、もっとしたかった。あーあー、でも冗談みたいな死に方だな。みんな笑ってくれるかな。……はははは。それだったら、悪くないな。うん。悪くない。

爆弾は、爆発しなかった。僕たちはそのあと平沢さんをなんとか羽交い締めにして穴から引きずり出し、すぐきた警察（コウが心配して呼んでくれたらしい）に事情を説明し、最終的には自衛隊も出

てくる大騒ぎとなり、僕は両親にこつてりと怒られ、学校にも呼び出され、怒られ、シャベル禁止令が下され、海に行っても潮干狩りをさせてもらえなかった。こいつを遊びに出すとろくなコトにならないと両親に家に軟禁され、僕の八月は本当につまらなかった。でも、命があっただけマシだと納得することになっている。

平沢さんは両親と一緒に一度、謝りにきた。なし崩し的にハンマーのくだりも先生や両親に話したから、彼女もこつてりと怒られてしまったみたい。目は泣きはらしたのか腫れぼったかった。そして呪いなんてことをしていたことがバレたら、彼女の立場がどうなってしまうか考えるといいたたまれなかった。

「ごめんなさい……」

深々と頭を下げる平沢さんに、僕は何と言葉をかけるべきなのだろう。彼女はまた学校にこれるのだろうか。不登校になったりはないだろうか。

「……ハンマーじゃなかったら、殴ったっていいからさ」

取りあえずそうとだけ言った。命があるだけマシ。その後大声でアハハハハハと笑ってやった。彼女も、彼女の両親もきよんとした顔をしていた。

「アハハハハハ、だって、冗談みたいじゃない。面白かった。アハハハハハ」

「……………」

きよとんと、していた平沢さんだったが、クスツと微笑んだ気がした。これでいい。これ以上に僕が出来ることなんて、ないだろうと思う。少なくとも中学生の馬鹿の頭で考えるぶんにはこれが精一杯。僕は、ベストを尽くした。

そうして、もう今年も夏休みが終わる。僕はずっと家にいたのに宿題に手をつけずにゲームやったりゴロゴロしていたから、今こうして宿題に追われているという有様。コウやユウトは元気にしてるんだろうか。時々携帯で話をするが、冗談みたいな会話で時間が埋め尽くされてしまい、状況はいまいち把握できない。それでも、ま

あよかった。僕は生きていて、そうして、ここで作文を書いてられるということに、取りあえずは感謝している。下らない勉強もガリ後藤の説教も、どちらかと言えば死ぬよりはマシだ。うん、よかった、と思う。思うことにする。

ま、これが、僕が夏休みに体験した事の顛末だ。うっぴょーん！なんて最後に付け加えたりして。意味はない。インパクト勝負。こういうことしとかなきゃ不安になる夕チなんですよ解って下さい。もう学校が始まる。平沢さん来たらいいな。ま、別に、来なかったら来なかったで……それでも生きてりゃ。らしくない、うっぴょーんうっぴょーん！ 中和中和。なんつって、お後を濁しまくりだけど、こんな感じでどんなもんでしょ。

二年四組 本条健

(後書き)

読んでいただけて、とてもありがたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8539g/>

いま、そこにある爆弾

2010年10月8日15時19分発行